
ヘルまんだむ！

桂菊菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘルまんだむ！

【Nコード】

N1481D

【作者名】

桂菊菊

【あらすじ】

ネット好きな男四人が何万分もの確率で選ばれた！？ギャグ満載の学園コメディー！。

序章・ログインの手続き（前書き）

「キレイ」は諸事情により中止しました。その代わりといってはな
んですが、練りに練って考え出しましたのがこれです。下手クソだ
ったとしてもそれは僕が未熟なせいです。しかし、全作よりは自身
はありますのでどうぞお読み下さい。

序章・ログインの手続き

東アジアの文明国、日本。

そこでは、いつ何時でも昼夜問わず活動がなされている場所がある。
インターネット。

老若男女誰でも利用可能なすばらしいシステム。
得たい情報を新鮮なままで享受できる。

買い物や映画の予約も可能なのだ。

しかも、チャットやメールで世界中の人々と通信出来てしまう。

まさに神の思し召し以上でも以下でもないタマモノである。

しかし……

そのインターネットは、元はアメリカ軍が、軍機密や情報網を守る
ために開発された軍事機関なのであった。

要は戦争の道具なのであった。

おそらく、この平和ボケ国家日本でインターネットをその目的に使
用する者はおるまい。

いや、

いたのだ。

このインターネットを、原点回帰して、

戦争目的に使用する者が。

いや、組織と言っべきだろうか。

とにかく、それを前提にして、この作品をお読み頂きたい。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

主な登場人物紹介

・近藤 進歩 すすむ

主人公。ハンドルネームは「ヘルまんだむ」。千葉の川崎出身。パソコン（特にギャルゲやオンライン）が好きな16歳。「ギャルゲ」と言えば小一時間ぐらいは話し続ける。嫌いな人は荒らしや寝落ちする人。

・ 沖田 健八 けんぱち

愛知の三好出身の今年16歳の少年。ハンドルネームは「丸木怒」マルキト。見た目はいい顔をしているが、あらゆるサイトで荒らしを行う極悪人。いくらアク禁しても、磨いたアクセス技術ですぐに侵入する。

・ 山口 登魯 とろ

東京の秋葉原出身のやはり16歳。ハンドルネームは「ch1n107」。生まれた頃からコンピュータに触っており、あらゆるソフトを乗り越えてハッキングを行う、丸眼鏡をかけた少年。妙にイヤミな性格。防衛省の極秘情報を盗み見たこともある。

・ 坂本 真九郎 しんくろ

高知の四万十市出身の言うまでもなく16歳。ハンドルネームは「坂本真九郎」、というかハンドルネームの概念すらなかった。まんまと言っているほどの田舎者。インターネットどころかパソコンにもろくに触ったことがない。天然ボケで抜けているところもある。口癖は、「アハハハハハハハハハハハ」。

序章・ログインの手続き（後書き）

まだ前書きとプロフィールのみです。期待して下さいね！です。

第一章・試験一週間前ぐらいからゲームは止めた方がいい（前書き）

試験前だったにつき、更新が遅くてすいません。一応しっかりと書いてつもりです。読んで下さい。

第一章・試験一週間前ぐらいからゲームは止めた方がいい

20007年12月某日 千葉 川崎

「だあああ！！！ちくしょう！誰だよ！誰なんだよ！」

自分のパソコンの前でこうぎゃあぎゃあ喚いている少年が一人。彼は今オンラインゲームをプレイしていた。

「ううう・・・こんなにプレイングがいいやつは初めてだよ・・・うわ、攻撃力・・・ぶつつつ！！6000！？高あああ！レベル89のオレでも1296なのに！！レベル・・・たった10で6000！？どれだけ高けーんだよ！」

彼の名前は近藤 進歩^{すすむ}。ネットゲとギャルゲをこよなく愛する少年。彼は今、プレイしているオンラインゲームで、レベルの割にはとてもなく能力値の高い戦士（正式にはユーザー）と遭遇しており、コテンパンというか、あたかもワカメがそうされるみたいにやられていた。

「ひいひい・・・殺される！アイテムアイテムウウウ・・・消えてるー！ー！ー！！！」

なんと、彼が今まで貯めてきたアイテムがなぜかキレイさっぱり消えていた。ホンのさつきまでは価値的に50000ゴールド（ゲームでの定番の通貨、というよりベタなような・・・）相当のそれを持っていたのだが全て失せていた。

「やばいやばいやばいやばい！！！！もう攻撃も防御もままならん！ちよつとー！その戦士^{ひつ}あー！ー！！助けてくださーい！！」

・・・という意志を伝えるべく

ヘルまんだむ：ただ今死にそうです。助け求ム

と自分のすぐ近くにいる戦士にむけ書き込んだ。

「誰でもいいから……この化け物を……」

ド・KILL魔：るせーんだよ　てめーでなんとかしろこのキモオタク（切）

「んだとこるううううあああ……！しかも括弧内に『切』って
なんだコラア……！」

続いてこう書き込みが。

ド・KILL魔：切腹しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ
しる切腹しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ切腹しろ
切腹しろ切腹しろ切腹しろ・・・

「これかいいい！『切』ってこれの布石だっかんかいいいいい！！つか・・・・これってあの荒し魔『マルキド』じゃねえか！名前もマルキドをひっくり返してちよつと変えただけだし！（マルキド ドキルマ ド・キルマ ド・K I L L 魔）」

そう。彼、マルキドは正式名称を「丸木怒」という。知るに知られたサイトをヤバイほど荒らしまくっている悪名高いヤツである。ちなみに、以前もこのオンラインで、ユーザー達から

「てめえ！何しやがる！泣かすぞ！」

「つつかオレらが泣きたいよ、
 とうかオレに至つてはもう泣きは
 じめてるよ！」

「オンラインだってある意味三次元なんだよ！」

「俺の嫁——！！！！！！」

・・・などという文句が発せられるほどの荒らしを行い、アクセス禁止になったのだが、いつの間にか復活していた。

「もういいよ！！オレもう帰る！」

と、進歩の方だが、助けを求むのはあきらめ、命から逃げてき

て、ログオフした。

その後、彼は静かにインターネットを楽しむことにした。

「新しいギャルゲの情報見つけるとでもするか・・・」

前述の通り、彼はギャルゲが好きなこともある。

どれくらい好きなのかというと、およそ「バクバクめもりある」等の有名なそれは全て購入し、攻略法や全キャラの名前は3日程度で把握出来るほど。試験前などでもきっちりやってしまう（それ故成績は低い）。後、「ギャルゲ」と言えば小一時間ぐらいは・・・え？前書きで言った？じゃあ言わない。

「ふんふん 彼女いない歴二年半」 中一につき合ってた娘いたけど半年でわかれた、でも気にしない」

やけに説明的な歌を口ずさみながらネットを散歩していると、彼はふと変なページに入った。

「ん・・・？『真 恋愛オンライン・・・・^{アハネット}亜羽都学園』！？」

彼は新しいギャルゲのサイトを見つけた。しかもオンライン。

彼がこれに飛びつかないはずがなかった。ハンバーグと卵が好きな人は目玉焼きハンバーグを見て飛びつかないハズがない。それと同じである。（そうかあ？）

「『真 恋愛オンライン 亜羽都学園』、かあ・・・製作会社は・・・ONAMI・・・ってバクメモと同じ！」

ONAMIとは、進歩の愛用している「バクバクめもりある」を作った会社である。他には「Sing Sing Revolution」や「超戯王」などを作っている。（現実世界に似たような会社及び作品名があるのはご愛嬌）

「なるほど・・・ふんふん・・・ん！登録ユーザー名と、本名、年齢、性別、住所、電話番号、メールアドレス・・・を入力して下さい・・・？細かいなあ、おい。」

すると彼が一瞬ひやつとする記述が目飛び込んできた。

『なお、13〜18歳でない方は当オンラインゲームを利用出来ま

せん』

ぶつつつつつ！！

彼は思わず、漫画で、おどろいて水を吐くアクションみたいに口から空気を吐いた。

危ないところだった、と彼は思った。彼は15歳。来年で16だが、余裕でクリアしている。しかし、なんでこんな制限を設けるのか進歩は理解出来なかった。

「ゲームを18以上がやってるとニートになるってか！？オレはそんなんなる気はなーけど！」

とはいえ、彼も来年は高校。どこか受けて入学せねばならないが、前述の通り、彼は成績が非常に悪い。おかげで、もし仮に『こんな高校、通ってる奴バカじゃない？ていうか馬鹿じゃない？ていゆかVAKAじゃない？』ランキングというものがあつたとして、その一位の高校に入れるかどうか怪しい状況なのである。

しかし本人はほとんど気にしてない。

「・・・よし、これ・・・で・・・完了っ！送信！」

クリックすると、このような表示が。

『ありがとうございます。後ほどに次連絡がありますので、お待ち下さい。なお、当オンラインは4月から正式にご利用になれます。』

「来年か。ま、楽しみに待ってるか！」

こうして彼はログインした。

「運命」という名のオンラインに。

第一章・試験一週間前ぐらいからゲームは止めた方がいい（後書き）

一日以内にまた投稿します。お楽しみにして下さい。

第二章・すいませんって便利な言葉だよね（前書き）

次話投稿いたしました。ギャグは少なめです。

第二章 - すいませんって便利な言葉だよ

2007年12月某日 愛知県三好町

「ん？なんだこのサイトは……ほ……よし、来年の荒らしのシヨバはここに決定^{けつてい}。」

12月某日 東京 秋葉原

「おやおや？また変なサイトが．．．変なプログラムのにおいがぷんぷんするな、ふふふ．．．うわ．．．すごい技術だな．．．侵入は簡単にできないな．．．ログインしてみても、面白くないことはなさそうだね、フーン」

12月某日 高知 四万十市

「お？なんね、これ？真……ってわしと関係あるんかの……名前と住所と……。書いてくれがと？アハハハハハハハ、『こんぴゅたあ』の命令なら仕方ないの〜アハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

その後

2008年1月某日 千葉県 川崎

「あゝ……進路どうしよっかな」

彼、近藤^{すすむ}進歩は外をぶらぶら歩き回っていた。さすがに彼もどこの高校に入るかどうかについて焦っていた。しかし焦っていても『こんな学校通って（以下略）ランキング一位の高校に入れるかどうか怪しいその学力は変わらない。

「あ~~~~・・・・いつそ高校行くのあきらめてどっか就職しようかな・・・・例えば、ONAMIとか・・・・」

そんなことをつぶやいて歩いていると、彼は自分のすぐ前方に車が

止まったことに気づいた。それは少々大きい、てかる程、真黒い車だった。

「え？」

彼は突然の出来事に一瞬びつくりしたが、その間もなく、車から黒いスーツを着、サングラスをかけた、ヤクザチックともダンディともいえそうな、じゃあいつそまとめてヤクザチックなダンディかダンディなヤクザと、いえそうな二人組みがこっちに近づいてきた。やばい！！と、進歩が思った頃には二人はもう話しかけていた。進歩に。

「すみませんが、君は近藤進歩さんですか？」

「は．．．はい．．．．．」

もう一人が続ける。

「やつぱり．．．．．」

ほっとしているような、俺の言ったとおりだったろ？みたいな表情をした。

そのまま続けた。

「なるほど。遅れましたが、私たちは警官でしてね。」

と、スーツの中から警察手帳を取り出しみせる。

「実はさつき、20歳くらいの若い女性がウチの署に来てね、人探しをしてるというんですよ。それで、その女性がいった人相などの情報が君と一致してたから、車から思わず声をかけたんです。」

「いや．．．は．．．．．そうですね．．．いや．．．なんというかすいませんでした．．．．．」

別になんら悪いことをしたわけでもないのに彼は謝るしかなかった。

「で、時間がありましたら同行願えますか？」

「え．．．はい．．．．．えと．．．．．わかりました．．．．．ので．．．．．こちらこそ．．．お殺さないようお願いします．．．．．」

「わかりました。おい、車にお乗せしろ。」

「後部座席でいいんだな？」

で、彼は非常にがちがちしながらそのテカテカ光る車に乗り込んだ。

表面がテカテカなら内部もテカテカで、ワックスでもぬってんじゃない？というほど光っていた。座ると、ギユウ、と音がした。

「あの、良ければこれ、お飲み下さい。」

と、男が紙コップに入ったお茶を渡してきた。しかし、進歩は緊張のあまり飲めなかった。

だまつて座つてると、進歩はこんな会話を聞いた。

「．．．おい．．．こりや．．．きやいけ．．．
．．．ばか．．．てあ．．．なつて．．．たろ．．．」

進歩には全てが怖くて怖くて仕方がないので、

「いやあの．．．いやその．．．すいませんというか．．．すいませんじゃないくて．．．けつきよくすいませんでした．．．」
と、つぶやくしかなかった。

すると、突然車の扉が開いた。すると簡抜いれず、

「失礼！！」

と声がしたかと思うと、後ろから取り押さえられ、ハンカチを口に当てられていた。

「もごもごもごも．．．ふお、ふおつと．．．ふあんふあんふえふは．．．
んぐぐ．．．」

彼は意識がうせてきた。

．．．
．．．
．．．
「．．．．．」
「は！！」

彼は気づいた。そして一瞬とまどったが、すぐに思い出した。

自分は確か．．．ヤクザチックなダンディかダンディなヤクザみたいな人たちが人探しとかいって自分を車に連れて、なんかハンカ

チを口にあてられ・・・

あたりは一面黒だった。しかし、さっきの車みたいにてかっではおらず、真っ暗闇だった。

いつたい自分はどうなるんだ・・・と思っていたら

おい

「え？なんだ？」

おい。ちよつと。

「何？誰かいるの？」

「誰かっておい・・・」

声のはつきりした。

声の主は目の前にいた。

「ここにいるよ。えと・・・お前誰？」

「・・・」

進歩はだまつたままだった。

「えと・・・お前も万引きしたとか言われたのか？」

つづく

第二章・すいませんって便利な言葉だよね（後書き）

次回から核心に迫っていきます。お楽しみにしてください。

第三章・偽造がニュースになったお菓子でもしばらくすればまた食べられるように

今話でプロフィールに出てきた少年達が全員登場します。

第三章・偽造がニュースになったお菓子でもしばらくすればまた食べられるように

「えと……お前も万引きしたとか言われたのか？」

そう言われた進歩であつたが、なんのことかよくわからなかった。
なぜなら、

「いや……オレは……とりあえず……警官に……なんかオレを探してるって……それで……いきなり眠らされて……」

眠つて以来とぎれていた、感覚が戻ってきた。がたがた揺れている。
トラックにでも乗せられているようだ。やがて、暗がり慣れ、声の主の姿が見える。

「あー……俺、沖田。おきたけんばち沖田健八ってんだけど。よろしく。」

自己紹介されたので進歩も返す。

「オレは……近藤進歩。よろしく……」

彼、沖田健八は見た目はいい顔をしている。少なくとも進歩には劣るまい。いわゆる美少年という奴か、可愛いというか、爽やかなルックスである。

「そうか。お前はそんな感じで連れてこられたのか。だが俺は少し違うんだ。」

「どんな？」

進歩は聞き返す。

「それはな、俺は三好……愛知県に住んでんだけど、ここに来る前に本屋にいたんだ。」

進歩は黙って相づちを打つ。

「『ジャソプ』や『スンデー』とかを立ち読みして、店の外に出ようとしたんだよ……その時にな……」

「その時？」

「アニメ雑誌コーナーに通りがかってな、オタクっぽい奴が熱心に『アニメーシヨ』読んでたんだ。それでな……」

ごくつ、と唾を飲み込んだ進歩。そして、こう続いた。

「からかったらどうなるかと思って、通り際にそのオタクに、『ゴツド・オブ・無職』って言ってやったんだよ。そしたらさーそのオタク怒り出して、『無職じゃない！ー二ー・・・いや、フリーターだ！』ってわめいてたんだぜー笑えるだろー。」

腹が立つほどのんきな声で健八は言った。

「はあああああ！！！？？？？」

当然のように進歩はこう叫んだ。

「で、その後警察が来て、万引きしたろって言われて、なんやかんやでここに着いたわけさ。」

「いや、ついでみたいにラスト話さないでよ！メインはゴツドオブ無職！？後肝心な部分をなんやかんやは、なしでしょ！そのなんやかんやを話してよ！」

すると、

「ちよつと・・・ごちゃごちゃうつさいよ・・・静かにしてよ・・・」

と、声がした。

声の主は進歩、健八とはまた違う少年の声だった。彼の自己紹介によると、名前は山口登魯とろというらしい。

「ふーん。君らもこのトラックっぽい所に連れてこられたんだ。奇遇だねーふふーん。」

登魯は、アニメのネズミの声が1、2段階低くなったような声でこういった。丸眼鏡をかけていて、体は小柄。絵にするとグルグルの入っている眼鏡少年といえようか。

「で、山口君はどうやって連れてこられたの？」

進歩が聞いた。

「えーと・・・警察に・・・なんやかんやで連れてこられた。」

「だからなんやかんやは何だっって言ってるでしょーがー！」

「うつせーな。俺ら寝起きで機嫌悪りーんだよ。百科事典の角で眉間殴んぞ。」

進歩のツツコミに健八がこう吐いた。続いて登魯も

「ったく、君は神経が太くていいね．．．僕は繊細だからそんなことできないやゝフフゝ」

「．．．．．」

進歩は何も言い返せなかった。

「ん．．．でもさ．．．なんでみんなこんなトラックみたいなの乗ってるかわかんないし．．．ねえ．．．」

進歩が控えめに言う。

「．．．．．まあ．．．しかたねえな．．．話してやってもいいけど．．．」

健八達は話し始めた。

まず、健八は、オタクにキングオブなんとかといった後、書店を出た。すると、警官らしき人が前に出てきて、君万引きしただろ、という内容のことを言われ、もちろん健八は否定したが、署で調べればわかる、とその警官は言って、黒いてかてかした車に連れ込まれたかと思うとやいなや、後ろから取り押さえられハンカチを口に当てられ眠らされ、気が付いたらここにいたらしい。

登魯は、地元の秋葉原をぶらぶらしていると、いきなりまたしても警官と名乗る者から声をかけられ、ここらでひったくりがあつて、犯人がこの通りを通ったので目撃してたら署まで証言して欲しいと言われ、急いでいると返答して去ろうとすると、逃げるのは怪しい証拠だとインネン付けられ、無理矢理引っ張られた。この後は健八と同じである。

「．．．つまり、オレも含めてみんな警察に連れてこられて、眠らされたわけだね？」

進歩はまとめた。

「ああ。俺ら、警察署まで運ばれてんじゃないか？」

「ホントに．．．最近の警察はひどいもんだねゝ。人の税金で食べるのに偉くなったモンだねゝフフフゝ」

「ホンにえらいのゝ。でも漁師の方がもつとえらいきによゝ」

「・・・・・・・・・・？・・・・・・ちょっと待て、お前誰だ！？」

いつのまにか健八でも登魯でもない、もう一人の少年が会話に参加していた。今度は天然パーマで、浅黒いサングラスを掛けた少年だ。
「ああ・・・・・・誰って・・・・・・ただの土佐っこじゃがの・・・・・・」

「ちがうつて。名前はなんだって聞いてんだよ。」
進歩がつっこむ。

「ああああ、アハハハハハハハ、そうじゃって。ホンにもう、おまんらはそっつかしいのゝアハハハハハハハ」

このとき、「土佐っこ」の彼を除く全員が腹を立てていた。こいつ殺してえええと、怒りのパトスを炸裂させていた。

「わし、坂本真九郎しんくろうってゆうきに。ちよつと海で潮風にでも当たろうとしちよつたらなんやかん・・・・・・」

「だー！ー！！だからそのなんやかんやを話してよ！」

「えいよ。なんか黒い服きたおんちゃんがかつちに来てな、こげなことゆうきに、付いてくるきたら眠らされてしもーたきに。アハハハハハハハハ」

「こげなこと・・・・・・？どんな？」

「えーとな・・・・・・確か・・・・・・ええと・・・・・・あ、思い出しよった！」「なんて？」

「えと、『おいしいお菓子あるけど、付いてきたらあげるよ』じゃった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

全員が黙り込んだ。いろいろと言いたいことがあつたから。

「なんだ、お前は！子どもの頃母ちゃんや先公にさんざん言われたこと覚えてねーのか！！『知らない人には付いていくな』って！オレは英単語をいくら忘れてもそれだけは覚えてました！」

「アハハハハハハハハハハハハハハハハ、うちのご近所さんはみな家族みたいなもんじゃからのゝ」

すると健八がこういう。

「なあ、おかしくねえか？」

「ん。」

「俺ら3人は警察に連れてこられたよな、だけど、その、真九郎って奴は明らかに誘拐犯みたいな奴につれてこられたろ。」

すると登魯が、

「じゃあ……これはみんな誘拐ってことじゃない……？」

……

全員が黙り込んだ。

「なあ……」

土佐っこの真九郎が口を開く。それに進歩が答えた。

「なんだ？」

「ひとつ気になることがあるんじやが……」

「なにかあるのか？」

今度ばかりは信用して進歩が聞く。

「おいしいお菓子はどこにあるんかの……」

……

また全員が黙りこんだ。今度は違う意味で。

「お前ええー！ー！！いい加減にしろ！そんなにおいしいお菓子が喰いたいんなら、その、いつそテーマがお菓子になれ！」

特にいいツツコミが思いつかなかった進歩。

「野郎！！お菓子の角で眉間殴んぞ！」

「いや、威力薄いでしょ！百科事典との格差は何！？」

「ん……みんな、ちょっと待って！」

登魯がいった。

どうやらトラックっぽいものがとまったらしい。

「おう！やっとお菓子が食えるのか？」

「お菓子はいいっていてんだろうが！！」

そして、次第に光が見えてきた。

第三章・偽造がニュースになったお菓子でもしばらくすればまた食べられるように

そして、次回、前書きで書いたあの組織登場です！

第四章・個性的だと損することもある（前書き）

あまりギャグは面白くないですが・・・よろしくです。

第四章・個性的だと損することもある

ツツコミとともに光が見えた。

やっぱりこれはトラックだったのだ。

窓が開き、景色が見えてくる。すると、さっきまで自分たちをさらった誘拐犯達、ヤクザチックな・・・あ、しつこい？ごめん、もう言わない。

誘拐犯達、黒服を着た男達が左右に整列していた。すると、男の中の一人が近づいてきた。

「では、お降り下さい。」

と、その男は言ったが、健八がこうさげんだ。

「お前ら！俺たちをさらってどうする気なんだ、こら。全員殺してもいいけどよ、後で少子化に響くだけだぜ。」

いや、オレらは殺されたくないから。勝手に人の運命決めないで。あと、4人程度じゃ多分響かないと思う、と進歩は思った。

「それは・・・その・・・申し訳ありませんでした！」

と、男は頭を下げ、大声で謝った。

続いて、申し訳ありませんでした！！と、残りの男達が揃って謝った。

「????????????」

進歩は戸惑った。自分たちを誘拐した犯人が、なぜその本人に謝るのだろうか。だったら誘拐なんて最初からしなきゃ・・・と思ってたが、

「本当に申し訳ありません。手荒なお連れ方をしましたが、そうするしか方法はなかったのです。では、こちらへおいで下さいますか。」

「

「あの・・・ちょっと、ええかの。」

真九郎が聞く。

「お菓子はま・・・」

「だからお菓子はいいって何度言ったらわかるんだこの田舎モンが
ああああああ！！！！」
進歩は渾身の勢いで叫んだ。

その後、別のでかい車に乗せられ、別の所に向かった。誘拐された時に乗りかけたあの黒い車のやたら横が広いバージョンと思えば差し支えない。

景色を見るとどうやら割と山中のようだ。どこに連れて行かれるのだろうか。

と、進歩は膝に置かれたサンドイッチを見つめながらこう思った。
サンドイッチは男達が一人一人に配ってくれたのだ。4人全員、横
一列に座っている。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

黙って食べていた。なんかしゃべる雰囲気じゃなかったからだ。しかしこういうとき必ず一人KY（空気の読めないやつ）がいるものだ。

「んん~~~~~~~~・・・・・うまいの~~~~やつとうまい菓子にありつけたの~~~~いくら待たすんじゃない~~~~　なあ、進歩^{しんぽ}よ、そのツナサンド、くれんがか？」

「ああ・・・・・あげるよ、坂本くん・・・・・あと『しんぽ』じゃなくて『すすむ』ね・・・・・てゆうか漢字で書いたオレの名前見たことないくせになんで間違うの・・・・・すすむって、自己紹介したよね・・・・・」

投げやりにこう答えた進歩であった。ちなみに、「しんぽ」じゃなく「すすむ」って読むの忘れないでね。

「うん・・・・・なあ、進歩。俺、気になったんだけど・・・・・」
健八がいう。

「何？」

こうして車内はバイオレンスに包まれたまま、数分後に目的地に到着するのである。

「痛い、痛い、何すんね、ひどいきによ……」
真九郎がぼやいた。

「せーっな！！歩くときぐらい黙っとけ！」

ここは進歩でなく健八がつっこむ。目的地についたので、車から降り、案内されているのだ。

「で、あんたら、俺らは一体どうなるわけ？身代金はいくらなんだよ？一億か？はっ。誘拐できるような度量と才能があれば一億なんてすぐ稼げると思うけどな！！」

ちよつと、ちよつと、健八君、あんまりそんなこといわないで。もしホントに誘拐犯だったら殺されるって……と、進歩は思った。

「あの、みなさん。着きました。」

男の一人がいった。へい、もうついたの、と思って前を見る。すると、

なんと前にはすごいものが建っていた。

なんと形容すればいいのか、城のようだといえいいかもしれないが、ロンドン塔か、アレキサンマルコ教会か、といえは大袈裟かもしれないが、これだけは言えるかもしれない。『学園のようだ』。で、彼らはその学園っぽいものの門のまん前に立っているわけである。

そして、進歩は学園っぽくてしかたがない、とか思っていたら、予想は確信に変わった。なんとその門には『あはねと亜羽都学園』とでかでかと彫られていたからだ。

同時に、進歩はふつとなにか思い出しかけた。いや、ほかの三人も思い出したはず。

すると、その、もうおそらく学園と確定した建物から誰かが出てきた。黒髪の長い、藤色のスーツを着た女性だ。

「ようこそ、亜羽都学園へ。私は『藤森 林檎』りんごといいます。あな

「た達は、選ばれし者として、ここに来てもらいました。」

第四章・個性的だと損することもある（後書き）

次章から本当に新展開、いきます。亜羽都学園の由来、わかったらすごいです。

第五章・名前でいちいち騒ぐのは未熟な証拠（前書き）

長らくお待たせしました。今年初めての投稿です。

第五章・名前でいちいち騒ぐのは未熟な証拠

藤森……林檎……選ばれた……？

進歩は呆然とした。

「ええ……突然呼んでしまいごめんなさい。あ、あなた達は、『真 恋愛オンライン 亜羽都学園』というページにアクセスしましたね？」

ああああ！！！！そうそうそう。そんなページだった！そんなページだったよ！進歩はこう思ったが、他の三人もそう思ったに違いない。

「……それで……あ、一度、みなさん、学園内にはいつて下さい！説明はそこです！では、案内して差しあげなさい！」

ハッ！とヤク……ごめんなさい……黒服を着た男達は気持ちよく返事し、こちらへ、と進歩達四人を案内しようとする。

少なくとも進歩はこのヤ……黒服を着た男達がヤクザ（結局使ってしまった）とは思っていなかった。どっちかというとボディーガードっぽい感じだった。藤森さんとやらいなくなっただが、さつさと学園内とやらに入ってしまったようだ。

と、いうわけで学園内とやらに入った進歩たちだったが、確かに「学園内」以外の何物でもなかった。いつしか漫画で見たようなあの清楚な感じのある風景である。歩く右側に数々の扉ドア、左側はガラス窓が平行して並んでいる。進歩が通っている学校もそんな感じのはずだが、決定的に違うのだ。正しく、端的に言うとするば、「パレルワールド」だろうか（ちがうと思う）。

と、進歩はこれに似たようなことを考えて歩いていると、遠くの方で声がする。わめく声のような叱るような声だろうか。そして進歩たちはその部屋の前に来て、そこにとまった。それには「校長室」と書かれていた。すると、

「手荒なお連れ方はするなとあれほど言っただでしょう!!?」

「申し訳ございません!」

というような会話が聞こえた。叱っているのはさつき進歩たちを迎えたあの女性に違いない。すると案内してくれた黒服の男の一人が、

「失礼しますう。」

とノックをする。

そして進歩たちはそのまま通された。入り際に部屋から出て行く黒服の男たちとすれ違った。叱られていたに違いない。

「減給1割はきついな」

「俺なんか減給プラストイレ掃除までだぞ」

「俺にいたっては減給プラス……うああ怖くていえない!」

という声が聞こえたが(特に三人目のセリフは)聞こえなかったことにしたい。

今、目の前にはデスクを構えて座っている、さっきの女性、藤森林檎さんがいた。

「えー、おほん。みなさん。突然お連れしてすみませんでした。私たちがここにお連れしたことはわけがございます。」

すると健八が、

「身代金がほしいのかい、青森さん。」

「藤森です。まあ……一言で申し上げますと、あなた方はここ、『亜羽都学園』に入学していただきたいのです。」

入学!? え、入学!? 乳我苦!? いやいや入学ですとおおお!!!!!!
「あれは……あのサイトで入学していただいたのは……
いわば入学手続きの様なものだったんです。」

また健八が、
「しかし、あれはONAMIの公式ページじゃなかったのかい、森永さん。」

「藤森です。それは、有名会社公式という形のほうが、人を怪しが

単位ものサイトをぼろぼろに荒らしましたね。あなたは知らないかもしれないが、あなたの荒らしのおかげで、パソコンがトラウマになった人は1000万人を下りません。」

ド・KILL魔：るせーんだよ　てめーでなんとかしろこのキモオタク（切）

「てめーかあああ！！！！てめーなのかあああ！！！！！！」

「せーなっ！今はそれどころじゃねーだろ！小銭握りこんだグーでなぐるぞ！」

「沖田・・・健八。」

「あ……そうきに。」

「え……今、言ったきによ……」

「ネームのとこ、本名入力したの!？」

「えええ……あなた……そんなことも知らないで、なん
でうちに接続したの!？」

その言葉を聴いた瞬間、進歩の手が真九郎の肩にのびる。真九郎は青ざめた。

「いや・・・じゃなくて・・・その、わしの父ちゃんかな、『これからはコンピューターの時代じゃ』ゆいて、『こんぴゅうたあを買ってのゝ。で、わしちよつといじくつちよつたらなぜか住所やら入力せいて書いとるからその通りに従ったきに。名前も書いたけど・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「私・・・何が間違っていたのかしら・・・あ、で、君は『ヘルマんだむ』君ですよね？」

やつと進歩の番である。

「はい。本名は、近藤 進歩^{すすむ}です。『進歩』って書いて、『すすむ』」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええと・・・・・・・・ひとつ言っておきたいことがあります・・・・・・・・その・・・近藤君と坂本君に・・・」

「？」

「ええと・・・・・・・・その・・・君たちには・・・・・・・・特に脅威の技をやつてのけたという・・・・・・・・記録がないのです・・・・・・・・!!!」

第五章・名前でいちいち騒ぐのは未熟な証拠（後書き）

次回で、「ログインの手続き」編完結です！（小説自体はまだまだ続きます。）

第六章・痴話喧嘩は自重しろ（前書き）

続きの投稿が非常に遅れて、申し訳ありませんでした。なんとか書き上げました。こちらの勝手な事情で長くお待たせしました。失礼ながら、まだ一章あります。

小説を楽しむになさってた方々に、深くお詫び申し上げます。

第六章・痴話喧嘩は自重しろ

な・・・何もやってのけてないだと・・・

進歩はある意味驚愕した。というか落胆した。なぜって、そりゃさつきこの人、「選ばれた人間」って言ったじゃん！あの二人だけじゃん！「選ばれた人間」って！一体どういうことなの！

「オ、オレと坂本君は、何もないんですか？本当に何もないんですか！？」

「ええ・・・ＩＤから探しても、過去１５年間のデータに少しも存在しません。何が間違ってたんでしょうか・・・やっぱり新システムを導入するのは・・・」

「ちよいと、先生。」

「何？坂本君？」

「わしはカツオを素手で捕まえたことが・・・」

「それとこれは関係ないです！すごいですけど！」

すると、扉が開く音がした。

「失礼します、校長先生。」

女生徒らしき人が二人、入ってきた。一人が四人の少年達を見てあつ、となつた。

「せ、先生！とうとうやってしまったんですか！私は反対していたのに！」

その女生徒は割りと短髪で、髪留めもつけずにおろしている、おまけにツリ目である。

ここで校長藤森、

「あ、その、神楽坂さん。申し訳ないわ。もう決定しなきゃいけないの・・・」

「決定って、そもそも女子校である我校に男子をいれるなんて言語道断です！」

なかなか強気だ。進歩たちは肩身が狭くなっていることは言うまで

もない。すると、もう一方の女生徒が口を挟んだ。

「まあ、まあ、そんなにヒスにならなくても。」

茶髪で、髪の毛の後ろを小さく縛っており、アホ毛が特徴的なこの女生徒は、神楽坂という少女とは舎弟のような関係なのだろうか。

「美琴^{みこと}……お前は黙って……」

「男なんて、もういるじゃないですか。」

「そりゃ、窓先生とかはそうだけど、あれは……」

「鈍いでスね。神楽坂さん。鏡を見ればわかりますよ。『嫌というほど』。」

大概の人は、美琴なる少女の真意を理解出来ただろう。

「ほう……それはどういう意味……?」

「神楽坂さんがおと……」

「コノヤロオオオオオオオオオオウ!!!!!!」

ケンカが始まった。二人の性格、および正しい関係が理解できる瞬間である。

そこで、なんとなく止めに入ろうとする進歩だが、

「ちょ、お二人さん、ケンカはや」

「うるさい!!」

「おぶう!!」

進歩は殴られた。ちなみに進歩は親父にも、とこの辺まで書いておいて続きのわからん奴はいないだろうから保留する。

こんな痛みを受けるのは……別れちまった彼女に

「私、オタクな生き物は嫌いだから。」

と言われた時以来だろうか……と進歩は思った。

しかし、すぐに殴った本人がこう言う。

「あ、そうだ。こんなことしてる場合じゃない。校長先生!またウチのオンラインであいつが!」

「何ですって!?!」

緊張が走った。進歩も心当たりがあるのかハツとなる。そして口を挟んだ。

「あの、もしかしてそのオンラインの名前って……」
次に健八、

「あれだな……俺たちの行ってた……」

藤森もそれに合わすように

「そう……」

これは三人同時だった。

「WILD LAND ONLINE - ワイルドランド・オンライン！」

「もしかしてそいつ、『チーターマン』っていうプレイヤーですか!？」

「そう。しばしばうちのオンラインに来ては、マナーよく使っている、罪なきプレイヤーたちを狩って行くのです。それもとてつもないステータスなの。通常のプレイでレベル10で攻撃力5000のステータスなんてありえないわ!」

進歩と藤森の会話である。

「しかもそいつ、ほかのプレイヤーの所持金データ、装備データも破壊するの! アクセス制限もセキュリティもまったくきかなくて、もうどうしようもないのです!」

間違いない、と進歩は確信した。あのとんでもないやつだ。そういうええ進歩の所持金も消えていたのだ。

今は、全員、主要コンピュータルームへ急いでいる。

「ハア、ハア……ここよ。主要コンピュータは。」

そこはすご過ぎるところであった。重そうな金属製の扉は、周りに監視カメラがついている。おまけになにやら液晶画面や数字パネル、マイクまで取り付けられている。横には、「校長、及びその認可を正式に受けた者以外の立ち入りを固く禁ず」の張り紙がある。

「特別にあなたたちの入室を許可します。」

と、いうが否や、数字パネルにパスワードを入力し、なにやらマイクにぼそぼそと話しかけ、その後、人差し指を液晶に当て、扉が横

に開いた。この間、わずか2秒である。

そして、入らされた部屋の中も別世界であった。ニュースでよく見る株式市場の映像を思わせるパソコンの量と並びである。そして、部屋の奥には巨大な機械の城があった。

「さ、早く、時間がないわ。」

そしてその城へと進歩達は行く。

校長藤森はさっきの要領でパソコンへとアクセスした後、すぐに「WILD LAND ONLINE - ワイルドランド・オンライン」を開ける。

すぐに、進歩と健八には見覚えのある映像が映った。また、進歩はあの忌まわしい記憶が脳内に蘇った。

藤森はすぐにその犯人を見つけ出す。間違いない。「チーターマン」だ。

彼女は必死に説得と警告を行う。しかし、相手はあのような鬼畜な行動をするやつだ。従うはずがない。そこで、実力行使を行った。

藤森は必死に指を動かし、キーボードをたたいている。タイピングゲームどころではない。キーボードを破壊せんばかりの勢いだ。おそらく追い出すためのプログラムを送っているのだろう。また、いつの間にか神楽坂と、美琴なる生徒も別のパソコンについてたたいている。

三人とも懸命に戦った。しかし、

「だめ……もうどうしてもできない……」

「ど、どうすればいいんですか！このままじゃうちのオンラインが……」

進歩たちは黙って見つめるほかなかった。しかし進歩はとても黙っていたられる状況じゃなかった。どうしてもあのひどい輩を懲らしめなかった。とはいえ、自分はそいつには勝てなかった。絶対に無理だろう。自分じゃどうしようもない、そう進歩は思った。すると、

「俺、やります。」

と、健八が名乗り出た。

「僕も、協力してあげてもいいよ？」

登魯もまた、力になるうとしてるようだ。

「え……いや……でも……そんな……あなた達には……」

「何言つてんだ。あんた、男の度胸や、行動の早さ、そういうのも必要なんだって、いつてたろ？」

「……」

「それに、今の状況じゃ何も変わらないことは明らかだ。俺らが二人加わって、良くなるか、悪くなるかはわからない。むしろ悪くなる可能性の方が強いとも考えられる。だがな！今の状況じゃ、悪くなくても、良くは絶対ならないじゃねーか！！こうなったらわずかでも、1%、いや、それよりも低い賭けでも、やるっきゃないだろう、若林さん！」

この瞬間、進歩は殴られたような衝撃が頭の中に走った。進歩は、自分に「何か」がなかった、自分では無理なのではない、ただ腰の抜けたギョゲオタク「だった」のだ。進歩はもう決めた。もう戻れない。

「藤森、よ。」

そして数秒の沈黙の後、続ける。

「わかりました。さあ、二人とも、時間はないですよ。」

もちろん、すぐ後に、あるギョゲオタクの叫びがあった。

「待った！僕も、協力します！」

第六章・痴話喧嘩は自重しろ（後書き）

次でいったん終了します。しかし、すぐに新章が始めますので、そちらのほうをお楽しみにください。

番外編・リスペクトで逃げても才能のないことに変わりはない

どうも。作者の桂です。

これはストーリーではありません。番外編です。タイトルにあるとおりです。もう次が書けたのかと思った方もいらつしやるかも知れません。その場合、本当にすみません。

それで、何を書くといいますが、この小説の人物等のモデル、もと、元ネタを明かしていこうと思います。

以前からこういうの書こうかと思っておりましたが、これを書くきっかけとなったのは、久しぶりに評価をいただいたのですが、そこに、「某週刊誌のキャラと似た名前では？」と書かれました。

そこで、気になっていらつしやる方々のために、こんな小説でも読んでいただけるお礼として、元ネタを掲載します。

また、評価を下さった湖唄様には、この場にかえて、お礼を言わせていただきます。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

・近藤 進歩^{すすむ}：元ネタは、週刊少年ジャンプ掲載、「銀魂」の登場人物、「近藤 勲」から。さらに元ネタを探ると、幕末の、新撰組の局長であった、「近藤 勇」から。また、下の名前は、そのキャラのアニメでの声優、「千葉 進歩^{すすむ}」さんから。ちなみに銀魂の近藤さんもギャルゲ好きです。

・沖田 健八：上と同じ漫画の人物、及び担当声優の「沖田 総悟」と、「鈴村 健一」さんから。性格も酷似。次回作ではこういうキャラ設定はきちんとしようと思います。

・山口 登魯^{とろ}：「ケロロ軍曹」の登場人物、「トロロ」と、担当声優の「山口 勝平」さんから・・・どんどん恥ずかしくなつて来ます。本当に才能がなくすみません。

・坂本 真九郎^{しんくろ}：これもまた上二つと同じ、「坂本 辰馬」と声優の「三木 眞一郎」さんから。本当にキャラ設定がパクリばかりです。泣きたくなります。

・亜羽都学園^{あはでし}：冷戦時代に、アメリカが国防目的で開発した、インターネットの開祖、「ARPANET」（アーパネット）から。これがわかった人は少ないでしょうか。

では、最後に神楽坂、美琴なる少女達の紹介、元ネタ解説もいたします。また、今後はもと寝た解説はしないと思いますが、希望がありましたら、またしたいと思います。では、これからも応援よろしくお願いします。次回作も楽しみにしてください。では。

・神楽坂 ゆかり

17歳。美琴とは腐れ縁の関係。ツリ目が特徴的。男勝りな口調だが、実は意外とさびしがり屋。いわゆるツンデレな性格といえる。元ネタは声優の「田村 ゆかり」さんから。

・沢城 美琴^{みこと}

16歳。ゆかりとは先輩後輩の関係のようで実は腐れ縁。見た目のかわいさとは裏腹に毒舌。ハッキング関係も得意な上、色仕掛けも

得意。そんな嫌なやつだが、腐れ縁のゆかりと共に、ネットでは目を見張るコンビネーションを行うこともある。

元ネタは声優の「沢城 みゆき」さんから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1481d/>

ヘルまんだむ！

2010年10月10日18時23分発行